

「進行性核上性麻痺における DaT SPECT 検査の有用性の検討」  
臨床研究へのご協力をお願い

進行性核上性麻痺(Progressive supranuclear palsy;PSP)は、眼球運動障害や姿勢保持障害、認知症などを主症状とする病気で、パーキンソン病関連疾患の一つとして位置づけられています。近年、PSPの臨床像はきわめて広範であり、典型例以外にパーキンソン病と似た経過をとるタイプやすくみ足が先行するタイプ、小脳性運動失調が目立つタイプなど多様な病型が知られるようになりましたが、これら臨床病型毎の特徴はまだ十分にわかっていません。

ドパミントランスポーター(DaT)SPECT検査は、黒質線条体ドパミン作動性神経終末に存在するドパミントランスポーターに特異的に結合する<sup>123</sup>I-Ioflupaneを用いたSPECT検査です。この検査では、従来は客観的な評価が困難であった黒質線条体神経の変性・脱落を半定量値として捉えることができます。PSPやパーキンソン病では黒質線条体ニューロンの減少を反映して線条体での取り込みが低下しますが、薬剤性パーキンソン症候群など黒質線条体ニューロンが変性しない場合は正常で、診断に有用であることが報告されています。しかし、PSPにおいて病型別取り込み低下の程度や時期が病型別にどう違うのか、あるいは鑑別が必要となる他の病気との違いは明らかにされていません。これらを検討し、病型別あるいは他疾患との差異を把握することは、PSPを正しく臨床診断する上で重要であると考えられ、本研究を行います。

調査項目は、患者さんの①病名(臨床病型)、②年齢、③性、④発症年月、④症状、⑤DaT SPECT検査所見、⑥その他の付随する臨床および検査所見です。

本研究は日常診療として行っている内容を振り返って検討する研究であり、これにより新たな検査や費用の負担が生じることはありません。また、研究で扱う情報は個人が特定されない形で厳重に取り扱います。皆さまの貴重な臨床データを使用させて頂くことにご理解とご協力をお願いいたします。本研究に関する研究計画書を閲覧されたい方、あるいはご自身のデータを研究に使わないでほしいと希望される方、またこの研究に関して質問や相談をされたい方は、下記の連絡先までご連絡をお願いいたします。

連絡先：

〒465-8620 愛知県名古屋市中東区梅森坂五丁目 101 番地  
国立病院機構東名古屋病院 神経内科 リハビリテーション部長  
研究責任者 饗場郁子  
☎ 052-801-1151 (代表)